

魚を売ることで生きる

沖縄県糸満のアンマーたちに学ぶ

私の最初のフィールドは沖縄の漁師町、糸満だった。大学院の修士課程に在籍していた一九九六年、調査のイロハも知らずに飛び込んだのだ。当時の私は、市場に生きる沖縄の生活文化を、魚を手がかりに探ろうとしていた

三田 牧
民博 機関研究員

大学院では沖縄県糸満で「海を読む」知識と魚を読む知識をもとに海と人との関わりを考えた。現在は、かつて日本に植民地支配されたパオオの人のびとの歴史語りを研究している。

女が経済的に自立して あたりまえの社会

耕作に適した土地の狭い糸満では、琉球王朝の時代から漁撈が盛んだった。糸満では魚をとるのは男性、魚を売るのは女性の役目だった。アンマーとは「お母さん」という意味の方言だが、「糸満アンマー」といえば魚売りの女性の代名詞でもある。

糸満アンマーは、魚を売った代金の一部を魚代として漁師に支払い、残りを自分の貯えとすることで知られてきた。男性が危険な海の仕事をし、女性に経済力を持たねばならなかったのだ。結婚前の娘でさえも自分の財をもつことを公然と認める社会は、戦前の日本では珍しかっただろう。

調査を進めるうち、私は何人もの魚売りのアンマーと知り合いになった。若い人で一九九六年当時四十歳



セリでカジキをみだてるアンマーたち

女たちにとって、魚を売って稼ぐことにはどういう意味があるのだろうか。一人でも立派に生きる

八十歳代のウミトウおばあは、まだ若い頃に夫と死に別れて子どももなかった。また、もともと糸満に奉公人として来た人なので、親戚も近所にはいなかった。

しかしこのおばあに孤独の影はなかった。手ぬぐいを首にかけて、市場に構えた店に立ち、買い手や市場の人と話す。売る魚はもっぱら冷凍



イカを頭にのせるウミトウおばあ

物で、売れ残るリスクを抑えていた。ほとんど稼ぎのない日もあったが、おばあはたいして気に留めていないようだった。

そうはいっても生活に不安がなかったわけではないだろう。一昔前、おばあは銀行から借金をして土地と家を買った。家の半分は人に貸し、残りの半分に自分が住んだ。おばあは体が丈夫だったが、もしもの時は家を借りている人たちに助けを求められることができる。

*現在糸満市といえば沖縄本島南部一帯を指すが、漁業で有名なのは行政区分では糸満市糸満である。

おばあは店先に足を運ぶことがあった。人一倍苦勞を重ねてきたおばあは、芯からやさしい笑顔をもっていたからだ。

お土産を持ってゆくと、「お金は大事にしなさい」と叱られた。はじめての調査を終えるとき、おばあが饑別としてくれた五千円を私はまだ大事に持っている。私にとってはお守りのようなものだ。

子どもを背中にしぼりつけてでも仕事はできる

やはり八十歳代のトゥクヤーのおばあは、行商をする数少ないアンマーの一人だった。魚の入ったたらいを他の人の力を借りて頭に載せると、細い体で上手にバランスをとり

ながら狭い路地を縫ってゆく。訪問先の家々でおしゃべりをしながら魚をさばき、売り渡す。おばあは、こんな商いをもう何十年と続けてきた。

おばあは夫が病気になったため、自分の働きで子どもたちを育てなければならなかった。魚を売ってその日食べるものを手に入れ、食べたらまた次に売る魚を探す。そのようなぎりぎりの生活だったという。

おばあは、久しぶりに私に会うときまわって「あんた、子どもはまだか？」と聞いた。「まだだよ」と言うと、「仕事は赤ん坊を背中にしぼりつけてでもできる。子どもを作りなさい！」と檄を飛ばされた。「親の苦勞を知っているから、おば

あの子どもにヤナー(悪いの)はいないさ」と、おばあはほこらしげに話していた。

八十歳を過ぎてからはさすがに子どもたちも心配し、「魚売りの道具を捨ててしまおうよ」と脅すという。しかし、おばあはおかまいなしだ。一人暮らしで誰にも見張られていないのをいいことに、まな板と包丁、そして魚を入れるたらいをもつて、いそいそとセリに出かけていた。

人とつながって生きる

糸満で知り合ったアンマーたちにとって、「働くこと」は「生きること」とほぼ同義だった。人それぞれ的人生を送ってきたが、魚売りは彼女たちが生活を切り開く術であった。

老年に達し、必ずしも魚を売らなくてもよい境遇におかれても、彼女たちは魚を売りに続ける。それは魚を売ることを通して人とつながることができ、からだろう、と私は思う。

家族があるうとなかろうと、一人暮らしであるうとなかろうと、彼女たちは孤独ではない。「人とつながりをもちながら生きる」という根源的な欲求が満たされているかぎり、人は幸福であることができるのだらう。

ほんの時々、この先どうやって自分の生活を作っていくか、不安がよぎることがある。しかし私の心にはアンマーたちの教えが刻み込まれていて、それは私にこう言うのである。「働けはいいさあ」と。

あつげらかんと前向きに、そして力強く、糸満アンマーたちはそれぞれの生活を切り開いてきた。彼女たちに研究者として育てられた私だ。糸満アンマーのように前向きに、研究者として生きてゆこうではないか。



糸満アンマーたちと筆者。中央が筆者(撮影・上原政幸)



おじいのとった魚を道端で売るおばあ



おばあたちは今日も魚を売る



魚の仕入れ時、おしゃべりに興じるアンマーたち